

M群では、5年間に4回のテイク・オーバーが起こっている。移籍してきた α オスが、新群の個体と社会関係を形成していく様子を報告する。

新 α オスは、交尾期に配偶関係から形成されたメスとの関係を足がかりに、新群の個体と社会関係を深めていく。この際重要なのは、 α メスとの関係である。詳しく観察できた年には、 α メスは出産期に当たる4・5月に発情し、新 α オスと積極的に交尾を行い、近接していた。この結果、他のメスたちも徐々に新 α オスに近接するようになり、毛づくろいも交わすようになっていった。元の α オスは β オスとして群れに留まっていたが、 α メスは以前頻繁に行っていた毛づくろいなどを全く行わなくなってしまった。

各種霊長類動物のヒト広義血液型活性と細胞内小器官の血液型抗原活性分布

永野耐造・大島 徹・高安達典（金沢大・医）

1. 諸種霊長類動物血球のヒト赤血球抗原型活性
ヒヒ、ニホンザル各2頭についてヒト赤血球抗原型判定用試薬で追加検査した。ヒヒおよびニホンザルとも前回の検査（霊長類研究所年報、第16巻、p 65、1986年）と同様の成績であった。

2. 霊長類諸臓器の組織・細胞におけるヒトABO式血液型抗原活性に関する免疫電顕的検討

材料：カニクイザル、アカゲザル各1頭およびマントヒヒ2頭から組織を採取し、細切した。

方法：細切組織を4%パラホルムアルデヒドで固定、エポキシまたはLowicryl K4 M樹脂に包埋し、超薄切片について以下の免疫染色を行った。即ち、エッチング後、1次抗体にモノクローナル抗A、B、Hを用い、コロイド金標識法で血液型活性局在部位を可視化した。また、近接水酸基をもつ中性糖蛋白を過ヨウ素酸-チオカルボヒドラジド-オスミウム酸反応（Thiery, 1967）で電顕的に検出した。

成績 1) 顎下腺：アカゲザルとマントヒヒの粘液腺細胞内粘液物質（中性糖蛋白に富む）には、O（H）活性と微弱なB活性が局在していた。

2) 胃：カニクイザルではA活性が、主に表層粘液細胞の粘液分泌顆粒や胃底腺壁細胞の細胞内分

泌細管・微絨毛表面（各々、中性糖蛋白陽性）に局在していたが、主細胞では陰性であった。

8) 小腸：カニクイザルではA活性、アカゲザルではB活性が、主に小腸粘膜・杯細胞内の粘液分泌顆粒や吸収上皮細胞の微絨毛表面（ともに中性糖蛋白陽性）などに局在しているのが認められた。

4) 膵臓：カニクイザルではA活性が、腺房細胞内の分泌顆粒（zymogen顆粒）に局在していた。

5) 肝臓：肝細胞では血液型活性は陰性であった。

総括：以上のABO式血液型抗原活性の局在様式は、別途検索したヒトおよびウシガエルでも共通に認められるもので、近接水酸基を有する中性糖蛋白の局在と密接に関連していた。

ニホンザルの母子関係における子守行動の影響

田中伊知郎（東大・理）

昭和59～61年の3年間、長野県下高井郡山ノ内町地獄谷野猿公苑の志賀A-1群を対象に、個体追跡法を用いて、母子関係を調査してきた。昭和62年度共同利用研究では、8才までの個体史を把握したコドモを個体追跡し、メスのコドモの子守行動に重点をおいて調査した。

子守行動について、生後1カ月以内のアカンボウ（以下新生児とする）を、未産のメスのコドモが世話することがほとんどできないことがわかった。その理由は、志賀A-1群において、母親が未産メスが新生児に近付くのを妨害するからである。昭和59年以来、新生児を未産メスが世話した行動は、個体追跡中の2例と、アド・リップ法によって観察された誘拐の1例だけである。このうちの2例で、新生児のrootingが観察されたが、未産のメスは、経産のメスがするように抱き上げてアカンボウを乳首のところまで持っていくことをせず、個体追跡中の1例では、抱いていたアカンボウを荒っぽく引き離し、誘拐中の例では、親指をしゃぶらせていた。アカンボウのrootingに対して、適切に抱き上げてやらずに引き離す行動は、産後1週間以内の初産の母親でも見られた。以上の点から、少なくとも授乳に関しては、出産前に育児を経験することがなく、自らが産んだ子を扱い、それに対するアカンボウの反応を見ながら学